
負の惨劇

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

負の惨劇

【Nコード】

N7269Z

【作者名】

k a i

【あらすじ】

ある日、ここ箱庭学園に転校して来た黒田暗示^{くろだあんじ}。暗示は理事長に呼び出されてある依頼をされる・・・

ハジマリ(前書き)

皆さんおはようございます、こんにちは、こんばんは。どうもk a iです。興味本位で書いてみました。少し短いですがご了承ください

ハジマリ

主人公になれるのかどうか分からない人

くろだあんじ
黒田暗示

今までの人生で人と話した事がないくらいーいやつ

暗示 side

ようし・・・どう自分を紹介するのか分からないんでここは少年漫画みたいな感じで紹介するか
よっ、オレの名前は黒田暗示だ。ひよんな事からここ箱庭学園に入学することになった。

それにしてもよく入れたな〜オレは学力全然ないのに受かったからな〜まあいいやオレは今度こそ友達を作るぞ！！

とまあこんな感じかな？自己紹介も終わったし、じゃあ行くか
ちなみにオレのクラスは1年マイナス13組だ。

オレは、まず理事長さんにアイサツしに行った
なぜ学園長の所に行くかって？

それはね、オレにも分からないさ
まあ、とりあえず部屋の前に来た

オレは、周りに誰もいないことを確認するとドアをノックし

「失礼します」

そう言っしらぬいはかまて中に入あんしんいんってみると

不知火袴と安心院あんしんいんさんがいた

え？何で知ってるかって？

それはね、オレのスキル 異世界知パラレルズノウというのがあってね
オレは、別の世界に行くことができて知らない人の情報をデータとして脳に記憶してるんだよ

「そこに座ってください」

オレは、イスに座って笑顔で言った

「何だよ老人二人がオレに用って」

「おいおい老人とは言ってくれるね」

安心院さんがうすら笑いを浮かべて言った
いつ見ても何考えてるのか分からない人だ
その時、袴がオレにこう言った

「君を呼んだのは他でもありません・・・黒神めだかを生徒会長の座から引きずり下ろして欲しいのです」

企画

何考えているんだ、このジジイは

「つまりオレを、悪役にしたい訳か・・・」

「そういうことです」

「えゝオレ絶対負けますよ」

「何言ってるんだよ、君の異世界知パラレルズノウがあれば相手の弱点なんて簡単に分かるだろ」

「いやゝこのスキルは、情報を手に入れる力で戦闘向きじゃないんですよ」

「大丈夫、君は他にもスキルを所持しているということは知ってるから」

「な・・・何の事ですかゝ？」

「しらばっくれるなよ、君のことは理事長から全て聞いている」

隠しても無駄みたいだな

「はいはい、分かりました」

「では、教室に戻ってください」

オレは、笑顔でこう言った

「はい、あっ、それと部屋に生徒入れるのやめてくれませんか？
さっきからうっとうしくて仕方なかったんです」

オレは、そう言うのと部屋から出ていった

袴 side

あの少年・・・気づいていましたか・・・
まあこれは、予想の範囲内のことです
もしも、これが分からないのであれば、彼はめだかさんに本当に勝
てないでしょう

「不知火君、本当に彼でいいんだね？」

「はい、彼ならやり遂げられるでしょう」

「毎度思うんだが、その自信はどこから湧いてくるんだね？」

「それは、年寄りの感です」

「そうか」

安心院さんは微笑みを浮かべながらおっしゃいました

暗示 side

オレは今、どこにいると思う？

そう！オレは今、教室の前にいる

とうとうこの時が来たぜ

ヤ・・・ヤバイよこれ、緊張してきた！

なくんてね、そんなお約束なパターンはもうとっくの昔にやっている

オレは、勢いよくドアを開け

「おはよう皆さん、転校して来た黒田暗示だよ、よろしくね！！」

その瞬間、釘バットがオレの頭上から振り下ろされた

オレは、一歩後ろに戻り、避けた

「おいおい、健全な高校生に危ない物向けるなよ」

「なっなぜ避けられた？」

「オレは、前に一度、お前の釘バットで殴られてるから知ってるんだよ」

「何言ってるんだ？お前とは、初対面のはずだが・・・」

「オレの、パラレルズノウ異世界知で別の世界でお前と会ってるんだよ」

「くっ！」

ここは、おもしろいそうなヤツらがいっぱいだな
ここなら、いっぱい友達が出来るぞ！

トモダチ

イエーイ！！

え？なんでそんなにテンション高いかって？

それはね、オレに新しい友達が出来そうだから

しかも、さっきオレを撲殺しようとした彼だぜ！！

何で仲良くなったかって？

回想シーン入りまーす

「お前俺のこと前に会ったって言ったよな？」

「ああ、そうだけど」

「だったら俺のスキルも分かるよな？」

「そうだね」

「行くぜ、アタツキングフォース攻撃軍！！！！」

そう言うど釘バット君はすごい速さでオレを殴ってきた

「イタタッ」

「どうだ！これが俺のスキルアタツキングフォース攻撃軍だ！！」

「ああ、何度もくらってるよ。確か・・・自分の攻撃を瞬間的に速くする・・・だっけ？」

オレは、にこやかに言った

「な・・・何で笑ってられる」

「そのスキルはもう攻略済みだよ」

「ち・・・ちくしょう」

「なあ、何でオレを襲ったんだ？何もしないのに」

「ああ？簡単だよ、転校生が来るって聞いたからうさばらしに一回殺しておこうと思ったからだよ」

9

動機・・・不純だな！！

まあいいや、とにかくオレの友達になってもらおう

「なあなあ、オレの友達にならない？」

「え？」

「オレ、友達1人もいないから」

「何で、友達がいらないんだよ」

オレは、友達がない理由を全て教えた
全て話し終えて釘バット君の顔を見ると鼻水たらしながら泣いていた

オレは、動揺した

おいおい！これは、パラレルズノウ異世界知では体験してないぞ！！
あの勇ましい顔はどこにいったんだ！！

「俺は、その話を聞いて感動したぞ！」

「お・・・おお！ありがとう」

「分かった、友達になってやる」

「え、なってくれるの！？」

「ああ、同じマイナス同士仲良くしようぜ」

「やったー！！！」

と言う感じで今にいたるわけだよ

「ところでお前の名前は？」

「俺の名前は不正ふせいれいじ怜次だ、お前は？」

「オレの名前は黒田暗示だ」

「ところで暗示、お前の好きなマンガ雑誌はなんだ？」

「もちろん男は黙って週刊少年ジャンプだろ」

「そうかそうか!! お前もジャンプ派か!!」

とまあ、オレの一日は終了していった

安心院 side

僕は今、廊下の天井を歩いている

そして、僕は色々と考え事をしていた

あの暗示という生徒が気になっていた

うーんこれは恋の悩みかな?

なうんてねあんな若造に恋愛なんてするわけがない

それに恋愛なんて、そんなくだらねえーカスみたいな感情とうの昔

に捨ててやった

さてと、しばらく様子を見させてもらおうよ

・・・黒田暗示君

宣戦布告

ふぁゝあ

おはよう、みなさん!!

今、オレは自分の家にいる

全くだいやくな天気だぜ(ちなみに今、晴れである)

え? 普通いい天気だろだって?

そうかな? オレにとっては嫌な天気だけだな

まあ、とりあえず学校の準備をするか

ゝ10分後ゝ

よし! 準備完了!!

では、学校にレッツゴー!!

オレは、何気なくいつもと同じ道を歩いていた

その時、曲がり角で誰かとぶつかった

おっ! これはラブコメで定番のパターンでは・・・ということとは女の子?

そこにいたのは・・・

善吉だったーーーー!!

「おっ! 悪い!! 怪我はないか?」

うん・・・別の意味で怪我をしたよ

「大丈夫だよ」

「そうか、良かった」

「じゃあ、オレは行くから」

「あつ、ちよつと待て！」

「何だよ」

「お前名前は？」

「黒田暗示だ」

「俺の名前は、ひとよしぜんきち人吉善吉だ」

知ってるよ

「ぶつかって悪かったな、今度、何かおごらせてくれよ」

「いや・・・別にそんなつもりじゃ・・・」

「まあ、そう言うなよ、じゃあな!!」

善吉はそう言うのと、どっかに行ってしまった

「あっちは、学校とは真反対の道だぞ」

オレは、そう呟くと鼻歌を歌いながら学校に行った
学校に着くと今日のことを怜次に話した

「まじかよ、生徒会の奴と会ったのか！」

「ああ」

「俺は、あいつらが嫌いだ！」

「何で？」

「俺達の球磨川先輩くまがわを生徒会に引き入れたからだよ！！」

「ああ、そういうことね」

そういえば、黒神めだかにアイサツをするのを忘れてたせつかく転校して来たんだからなじゃあ、行くか！

「悪いな怜次、急用ができた」

「何だよ急用って」

「ちょっと、アイサツ周りに行く」

「おう、分かった」

善吉 side

俺は、いつもと変わらず庶務の仕事をこなしながら、平穏な毎日を送っている
しかし、なぜか今日だけはいつもと違う感じがする
めだちゃんにいたっては、いつもと変わらず生徒会長の仕事をしている

阿久根先輩と喜界島あぐね きかいじまも変わらず仕事をしていた
球磨川も、いつもの通りニヤニヤ笑いながらジャンプを読んでいた
気のせいかと思って仕事に戻ろうとしたとき

「おっはよーございます!!」

いきなりデカイ声が聞こえてきた
何だ!?! と思ひ声のする方を見た
そこには、黒田がいた

「え、黒田? 何でお前がここに?」

「ヤッホー、善吉君久しぶりだね」

「いや、朝会ったばかりか」

「何だ善吉、知り合いか?」

「あ・・・うん、朝忘れ物して走って取りに戻ろうとしたときぶつ
かった時に会ったんだよ」

「ていうかお前、ここの生徒なのか!?!」

「そうだよーちなみに学年は一年マイナス十三組だよ」

「「!!」」

『やったーばくに、新しい後輩ができたー!!』

「そうですね、球磨川先輩」

『あれ？なんでぼくの名前を知ってるの？』

「それは、秘密です」

「ところで何でお前がここにいるんだ？」

「ん？ああ、それはね、黒神めだかを生徒会長の座から引きずり落とすためだよ」

「「「！？」」」

「あ！口がすべった」

「大丈夫だよ、今日はアイサツだけだし」

何だこいつ？言ってる事が球磨川並だぞ！！
その時、めだかちゃんが

「おもしろい！！いつでも勝負を受けてやる！！」

「ありがとう！じゃ、オレは教室に戻るんで」

「おお！待っているぞ！！」

黒田は、みんなに一礼して帰って行った

暗示 side

ふゝ緊張したゝ

「いやゝ良かったよ暗示君！！」

天井から安心院さんがぶら下がっていきなり言ってきた

「安心院さん・・・」

「ぼくは、君を見直したよ。生徒会全員に大胆発言！」

「いや・・・あれは、口がすべっただけですよ」

「そうかい？でも良かったよ、球磨川君以来の発言だよ」

「そうですか？」

「そうだよ！」

「ありがとうございます」

「ところで暗示君」

「はい」

「一つ聞きたいことがあるんだが」

「なんででしょう？」

「君・・・本当にマイナス？」

宣戦布告（後書き）

かなりがんばりました！！

お話

「え、今なんて？」

「君は本当にマイナスなのかい？」

「それって一体どういうことですか？」

「僕は、ずーと君を見ていた、そして、気づいた」

「何に？」

「君の過不荷だよ」

「え？」

「普通マイナスな生徒は、いつも勝つことに憧れている」

「しかし、オレの場合は勝つことに憧れない、でしょう？」

「そう！君の過負荷、パラレルズノウ異世界知がいい証拠だ」

「・・・」

「あのスキルは、どう見てもアブノーマル向きだ」

「・・・」

「そして、聞くが、何で君はこの学校に来たんだい？」

「うーん、親の都合ですかね」

「本当にそうかい？」

「そうですよ」

安心院さんは、光のない目でオレを見てきた
まるでオレの心を見透かしているようだった
そして、安心院さんはこう言った

「まっいいや！」

「今の話を聞いてみると君は、マイナスじゃないということが判断できたよ」

「！」

「じゃあ、僕は帰るね」

「ちょっと待ってくれ！！」

「何だよ僕は、速く帰ってジャンプを読まなきゃいけないんだぜ」

「聞かなきゃいけないことがある」

「何だい？言ってみな」

「オレは、何者なんだ？」

「うーん、言われてみればそうだったね」

「でも、そういうことは自分で分かろうと努力するんだよ」

「じゃあ、がんばってね」

安心院さんはどっかの青春マンガみたいな台詞を吐いた
安心院さんの答えがあまりにも期待はずれだった
その時、安心院さんが

「ああ、そうそう知ってるかい？」

「何ですか？」

「・・・新しいクラスが作られるらしいぜ・・・」

「え！マイナスの次にどんなクラスができるんですか？」

「おっと！ここから先は言えないぜ」

なら話すなよ!!

オレは、心から思った

「何ですか？」

「ここで話したらおもしろくないだろ」

「そんな」

「まっ、がんばって」

そう言うとき安心院さんは、去っていった

「まあそんなに自分を責めるなよ」

オレは、びっくりして後ろを見た

そこには、みかけない制服を着た女子がいた

黒い髪でロングヘアーの子だった

こいつは、誰だ！

パラレルズノウ
異世界知でこんな奴いなかったぞ！

「まあ、そりゃあそうでしょ、だって私は、この世界にしかないんだから」

「!？」

なっ！

こいつオレの心を・・・！

「うん、私は心が読めるの！これが私のスキル・・・心読み（メンタルリード）」

「お前・・・何者だ！」

「そんなに身構えるなよ・・・私の名前は綺羅瀬^{きらせしんい}真意あなたの兄妹」

「!？」

「なんてねー簡単に言うとなあたと同じかな」

「同じ・・・だと！」

「そう、私は自分が何者かが分からない」

こいつも・・・

「ところで綺羅瀬お前は、なんでここにいる？」

「それはね、転校して来たはいいんだけど場所が分からなくてね」

「お前、ここじゃないのか？」

「うん」

「どこの組だよ」

「えーとね・・・・・・・・・・・・・・・・ポースマイナス十三組！」

なっ！

そんな組ねえぞー！
何言ってるんだ！？

「あるよポースマイナス十三組」

「確かあなたもポースマイナス十三組のはずだよ」

「な・・・何言ってるんだよ！オレは、確かにマイナス十三組のはずだ！」

「それは、新しいクラスが出来るまでの間じゃないのかな」

もしかして、安心院さんが言った新しいクラスって・・・

「そう、ポースマイナス十三組なのだ」！

自分（後書き）

ポースの意味が分からない人のために説明します
ポースというのは、日本語で言うところに見かけという意味です
意味の分からない英語を使ってしまうてすみません

ポースマイナス十三組

まじかよ・・・

「そうそう、まじもまじ、大まじさ!」

「・・・」

「どうした? 不安そうな顔だね」

「いきなりそんなクラスに入ることになったから少し驚いてるんだよ」

「ふん」

「そういえば、あなたの名前を聞くの忘れてた!」

「オレの名前は、黒田暗示だ」

「へーよろしくね・・・本当は名前知ってるんだけど」

「なら聞くなよ!」

オレは、笑っていた

そして、綺羅瀬も笑う

いつの間にか、心の中のもやもやが消えていた

「でっ、いつからオレはポースマイナス十三組に移るんだ?」

「うゝん、明日かな？」

「適当だな」

「まあいいじゃん！じゃあ、私は、帰るね」

「え？もう帰るのか！？」

「うん、今日はただ下見に来ただけだから」

「そうか、じゃあな！」

「うん、じゃあね」

綺羅瀬は、黒い髪をなびかせて去って行った

その後、怜次が来た

「なあ黒田、さっきすんごい美人な奴見かけたぞ！」

「そうか、なあ怜次」

「さっきは、冷たい態度とって悪かったな」

「ん？ああ！あの時か、別に気にしてないぜ」

「そうか、良かった」

「なあ、黒田ラーメン食いに行こうぜ！」

「ああ！いいぜ！！」

こうして、オレの一日が終わった
翌日、目が覚めた

なんか体に妙な違和感があるな
布団をめくってみると

そこには、裸の綺羅瀬だ――！！！！！！！！

「な・・・何でお前がここに！？」

「うーん・・・あつ、おはよう」

「おはようじゃねえー！！とりあえず服を着ろ！！服を！！」

とりあえず綺羅瀬に服を着させたオレは、なぜここにいるか聞いた

「もう一度聞くんが、何でオレの家に？」

「いやー私、天涯孤独てんがいこどくだからさー寂しいから黒田の家にお邪魔した
訳よ」

「え？どうやってオレの家を知った」

「えーとね、黒田君をずーとストーキングしてたんだ」

へ・・・変態か、てめえは！！

「変態じゃないよ！」

まずい！かなりまずい！！

こんな所を親に見られたらどう思われ・・・る・・・か
オレの、部屋の前で母さんが冷たい視線でこちらを見ていた

「暗示・・・あんたって子は・・・」

「いや、母さんこれは誤解・・・誤解なんだ」

「母さんは、悲しいよ、いくら思春期だからと言ってこんなかわいい
い子に・・・」

「だから誤解だって！！！！！！！！！！」

何とか、オレは母さんに全部事情を説明した
母さんは、半信半疑な感じだったが、オレの言ってる事を分かって
くれた

「はあ、朝から疲れた」

「まあ、そんなに気にするなよ！」

「うるせー！誰のせいでこんなことになったと思ってる！！」

「うーん、暗示かな？」

「なわけねえよ！ていうか名前で呼ぶな！！」

こうしてオレの疲れる一日が始まったのだ！！

キャラ設定 and プロローグ（前書き）

今頃ですけど、キャラ設定とプロローグを書いてみました

キャラ設定 and プロログ

くろたあんじ
黒田暗示

人は、「仲間」があつて成り立っている

異常も過負荷もそうだ・・・

みんな、「仲間」がいるからこそ今の自分がいる

しかし、ある少年にはその「仲間」がない・・・

そう・・・黒田暗示である

少年は今、何を思うか・・・

パラレルズノウ
異世界知

自分が他の世界に行ける能力である

人の情報や弱みになる情報を自在に知ることが出来る

しかし、この能力はあまり戦闘向きではないため実戦では、あまり期待できない

その他 スキル

・他にもスキルがあるらしいが本人はあまり使いたがらない

好きなもの

- ・ハンバーガー
- ・ポテト
- ・ステーキ
- ・焼肉
- ・その他もろもろ

嫌いなもの

- ・キャベツ
- ・ブロッコリー
- ・漬物
- ・にんじん

性格

意外と気さくな性格で、普段は不真面目だがここぞ、という時に力を発揮する

意外と清純な高校生

人がボケたら心の中では意外とツツコミをいれる

綺羅瀬真意きらせしんい

少女は、己が何者かが分からない・・・
ずっと、ずっと、悩む時

ある少年と出会う

彼女もまた何を思うか・・・

心読み（メンタルリード）

人の心が読める能力である
実戦で使えそうだがまだ試されていない

その他 スキル

・彼女もいくつかのスキルを所持している

好きなもの

- ・ ケーキ
- ・ パフェ
- ・ いちご
- ・ ぶどう
- ・ その他もろもろ

嫌いなもの

- ・ ゴーヤ
- ・ 納豆
- ・ なす
- ・ ピーマン
- ・ その他もろもろ

性格

自由気ままな性格
人をからかうことを好む
少しSな所もある

襲撃と真相

はあく疲れた・・・

何でこんな事に・・・

やあ、皆さん今オレは、学校の登校中だ

え？なんでそんなにテンションが低いかって

それはね、こいつがいるからだよ

「こいつって言うなよ黒田君！私達友達でしょ〜！」

そう、綺羅瀬だ・・・

「いつの間にお前と友達になったんだ!？」

「えー私達、同じ穴のムジナでしょ〜？」

「・・・」

そんなこんなでしゃべりながら歩いていたら善吉が目の前に現れた

「どうしたの？善吉君」

「お前ら一体何を考えているんだ!?!」

「へ、何の事?」

「とぼけるな!?!」

そう言うとき善吉がオレに蹴りを入れようとしてきた
その時、綺羅瀬がそれに感づいてオレの服を引っ張り助けた

「危ねえ!」

「大丈夫? 黒田君」

「ああ、サンキュー!」

「おい善吉! 何しやがる!?!」

「うるせえ!」

蹴りをいれてきた
ちっ! しょうがねえな! あまり使いたくなかったけどあれを使うか
!!

「パーバリンティ天の邪鬼!?!?!」

それを言った瞬間、善吉が地面に倒れた

「何、そのスキル？」

綺羅瀬が言った

「ああ、このスキルの名は天の邪鬼、パーバルシテイ相手の言ってることややることを逆にするんだ」

「つまりどう言う事？」

「例を上げて説明すると相手が右の道を行くと言ったら自分が左に行く、みたいな感じかな？」

「ふう〜ん」

「つまりさっきの善吉君は、怒りと闘争心が強かったけど、天の邪パーバルシテイ鬼を使うことで善吉君の怒りや闘争心をなくしたんだね！！」

「そう！で、これ色々なスキルにも影響あるから嫌なんだよね」

「例えば、お前の心読み（メンタルリード）あるだろ？」

「うん」

「これがあれば、お前のそのスキルを逆にしてお前の心の中が丸見えになるわけよ」

「黒田君・・・」

「ん？」

「変態だね」

「うるせえ〜！」

だから使いたくなかった・・・

「とりあえず、こいつを起こしてオレ達を襲った理由を聞こうじゃないか」

「そうだね」

オレは、天の邪鬼^{パーバルンティ}を解いた

解いた瞬間に、オレは善吉君の胸^{むな}鰭^{びれ}を掴んだ

「おい！なんでオレ達を襲った！！」

「最初に襲ったのは、お前らの方だろ」

「はあ？何のことだ？」

「知ってるぜ、暗示は確かポースマイナス十三組だったことを！！」

「どこでそれを！！」

「昨日、生徒会の仕事をしてる時にポースマイナス十三組の1人が俺達を襲ったんだよ！！！！」

「そいつが暗示のことを言っていたんだ！！」

「！？」

「おかげで俺達は、ぼろぼろにやられ、めだかちゃんはどうっかに行っちゃもう生徒会は始められなくなっちゃった」

「そういうことか」

オレは、両手を善吉の肩に置きこう言った

「なあ善吉、オレは確かにポースマイナス十三組だが決してお前らを傷つけるつもりはない！！！」

善吉は、驚いたような顔でオレを見た
そして、オレはこう言った

「オレが、その犯人を捕まえてやる！！！」

忍びよる影

第三者side

理事長室で安心院と不知火理事長が話していた

「いやゝ参ったぜ不知火君！」

「まさかマイナス十三組があるにも関わらずポースマイナス十三組なんて中途半端な物を作るんだからね！」

「・・・はい」

「どうした？君らしくないぞ」

「実は、ポースマイナス十三組に予想外のアクシデントがありました・・・」

「なんだい？」

「せんだうれいふ仙道麗不が生徒会を襲撃しまして、多大な被害を受けました」

「ああ、麗不君かあ、確かに彼はちよつと厄介だねえ」

「まあ、その所は大丈夫さ！」

「ポースマイナス十三組には、彼がいるからね」

一方、その彼は・・・

「ちくしょー！！忘れ物したー！！！！」

走って家に忘れ物を取りに戻っている所だった

暗示 side

くそ！

どこのどいつだ！！

オレの大切な大切な友達を傷付けたのは！（本当のところ分かんが）

「どっかのマンガの台詞みたいだね」

「うるせえー！ていうか何でお前もついて来るんだよ！！」

「ん？暗示君のことがだいたいダーイスキだから！！」

綺羅瀬が、笑いながら言った

「はあ？」

「だから私は、黒田君を守る！」

意味が分からん！

そんなことを話している内にオレは家に着いて忘れ物を取り、学校にダッシュ！！

はあゝ走るスピードが上がるスキルが欲しいなゝ

「そんなこと思ってる暇があったら、今この状況をどう打破するか考えて！」

「分かってるよ！」

（15分後）

ふうゝ何とか着いたな

あっ！そうだ！！

怜次に、クラスが変わること言ってなかった！！

「じゃあ、言ってきたら」

「分かってる」

「ていうか、いちいち人の心を読むなよ！！」

「あっ、ごめん」

オレは、急いでマイナス十三組に行き怜次にクラス変えのことを話した

「え！？まじかよ！！」

「ああ、まじだ」

「そうか・・・でもクラスが変わっても俺達の友情は変わらないぜ！！」

「それは、なんのマンガの台詞だよ！」

「ばーか、これは俺の台詞だよ」

「そうか・・・」

「じゃあな、そろそろ時間だから」

「おお！またな！！！」

そう言っ
て怜次と別れて廊下を歩いていた
良かった
あまり怒ってなくて
ぶっちゃけ心配だった訳よ

「何が？」

「怜次が、我を忘れて暴れまくるんじゃないか・・・って」

そこには、綺羅瀬がいた

「ふうーん、そんな事考えてたんだ」

「なっ・・・！」

「いつからいたんだ!!」

「ん？暗示君が、廊下に出てきた時から」

「影が薄いな!! お前は、日之影先輩か!!」

「ん？誰その人？」

あつ、そうか、こいつ日之影先輩のこと知らないか・・・

「何でもない」

「えー気になるじゃん!!」

「何でもないったら」

みたいなことを話しているうちに教室に着いた
ドアを開けてみると・・・誰もいなかった

これは、一体どういうことだ？

登校義務がないのはアブノーマルだけなのに・・・

「確かに、変だね」

「私も、このことは聞いてないわ」

「そりゃあ〜そうですよ」

「「!!」」

後ろから、得体の知れない声が聞こえた

まるで、体にベタベタ触ってくるみたいに

後ろを振り返ってみるとそこには、仮面を被ったような笑顔の少年がいた

なっ！

こいつ、いつの間にオレの後ろに!!

ていうか、後ろに登場するの流行ってるのか!?

「お前は誰だ!」

「ミーですか? ミーの名前は、せんだうれいふ仙道麗不です」

「なぜここにいるんだ?」

「なぜって・・・それは、ミーがポースマイナス十三組だからです」

「そうなのか!？」

「はい」

こいつ・・・仮面のような笑顔のままで、全然表情をださない

「じゃあ麗不、もう一度聞くが、何で他のポースマイナス十三組がいないんだ？」

「・・・」

気持ち悪い笑顔のまま何も話さない
オレは、イラついて

「答えろよ!！」

と言った

その瞬間、麗不の口がどんどんつりあがって耳の位置まで行きそう
なくらい上がった
そして、こう言った

「みなさん、他の組を潰しに行きました」

偽者の友情

「なっ・・・何考えてるんだ！」

「何考えるも何もミー達は、全て平等にしようとしているだけです」

こいつ・・・何言ってるのか全然分からん

「あれえゝおかしいな」

「あなたもポースマイナス十三組なら分かるはずですが」

「生憎^{あいにく}オレは、天の邪鬼だからそういうのは、理解していない」

「そうですか」

「なら、そちらのお嬢さんはどうです？」

「バーカそんなこと綺羅瀬が知るわけないぜ」

「なっ！」

「・・・」

嘘だろ・・・

いや、そんなはずない！
そして、もう一度聞いた

「綺羅瀬はそんなこと知らないよな！」

「・・・知ってる」

なっ・・・！！

「隠しててごめん、黒田君」

「何で教えてくれなかったんだよ！！」

「もしも、黒田君がこのことを知ったら転校しちゃうと思ったから・
・・」

「まあ、そんなに彼女を責めないであげてください」

「うるさい!! ところで何なんだよその平等てやつは!!」

「まあ、落ち着いてください」

「ミー達は、ある計画をしているのです」

「何だよ」

「それは・・・裏フラスコ計画です!!」

「裏フラスコ計画だと!？」

「そう!! フラスコ計画は「天才」を作り、裏フラスコ計画は、「落ちこぼれ」を作るんです」

「それが、クラスを潰すのに何が関係あるんだよ」

「関係大あります」

「ミーの仲間は、他のクラスに攻め入り仲間を増やしていくのです」
クラスメイト

「どうやって仲間を増やすんだよ」

「はあく本当には知らないんですね」

「ミー達ポースマイナス十三組は、一度でも敵と戦うと戦った相手は、無意識の内に仲間になるのです」

「暗示君は、マイナス十三組の人と戦いましたよね？」

「なっ！何でオレの名前を？」

「暗示君は、ここのクラスでは有名人ですから」

「た・・・確かにオレは、怜次と戦ったと思う」

「ミー達は、戦った相手を仲間にできる体質なんです」

「そして、戦った相手は自分と同じレベルに下がるのです」

何だよそれ!!

ほとんど球磨川先輩の却本作り（ブックメーカー）じゃねえか!!
ていうか、怜次と仲良くなったのはこの体質のおかげ？

「うん、そうだよ」

綺羅瀬が言った

「お話がお分かりになったようで」

「それで何で、麗不がここにいるんだ？」

「はい！あの有名な暗示君にごあいさつに来たんですが・・・」

「どうしたんだよ」

「ミー達の友達作りにどうも納得がいかないようですので、排除させてもらいます」

「黒田君危ない!!」

綺羅瀬がそう言う

オレは、身の覚えのない教室にいた
誰もいない・・・

「どこだここ？」

「ここは、中学校の教室だよ」

そこにいたのは、黒い髪の・・・安心院さん！！！！

「やあ、黒田君！」

「元気してた？」

「それよりも、ここは中学校ってどういうことですか？」

「じゃあ聞くが何でここにいますか？」

「・・・夢とか？」

「まあ、当たってるっちゃ当たってるね」

「じゃあ、回答をするよ」

「はい」

「君は、死んだんだよ」

逆サーティーンパーティー!

綺羅瀬 side

「黒田君、しっかりして!!」

私は、必死に黒田君の名前を呼んだ

「無駄ですよ」

「もう、死んでいます」

こいつ、一体黒田君に何をしたの？

落ち着け私!

さっきのことを思い出すの!!

く回想く

「ミー達の友達作りにどうも納得がいかないので、排除させてもらいます」

どこからか、13人の男女が現れて

そのリーダー格みたいな奴が言った

「おっと！仙道さんこいつを殺るのは、僕に任せてもらえませんか」

「おおっ、裏サーティーンパーティーじゃないですか」

「他のクラスの制圧はどうになりましたか？」

「楽勝でした！」

「手応えがなくて拍子抜けでした」

「そうですか」

「なら、ご褒美にこいつをあげます」

「いやいや、こいつを殺るのは、私です！」

「いいや、俺ですよ！！」

「もう、面倒だからみんなで一斉攻撃はどうですか？」

「ああ、それいいですね」

「「「「「「じゃあ、一斉のーで!!」」」」」」

（今）

「さて、そこのお嬢さんはどうしますか？」

「・・・」

「もしもーし、生きてますかー？」

「・・・るさい・・・」

「はい？」

「うるさい!!!!!!」

私は、怒りで我を失って第二のスキルを発動させようとした
その時、誰かが来て私を止めた

「どけーーー!!」

「落ち着くのだ、綺羅瀬1年生」

そこにいたのは、

「気持ちには分かるが、ここは引くぞ」

めだかさなんだった・・・
その瞬間、意識を失った
目が覚めると保健室のベットに私はいた・・・

「あ・・・れ・・・？私・・・」

「目が覚めたようだな綺羅瀬1年生」

「めだか・・・さ・・・ん」

「あい・・・つ・・・ら・・・は・・・？」

「うむ、何とか逃げ延びたぞ！」

「あっ！黒田君は？」

「すまない、お前を助けるだけで精一杯だった」

「そうですか・・・」

私は、泣いた

ひたすら泣いた

大切な物を守れなかった悔しさと恐怖に

「綺羅瀬1年生、大切な人を守れなくて悔しいか？」

「はい！」

「強くなりたいか？」

「はい！」

「誰かの役に立ちたいか？」

「はい！」

「そうか・・・ならついて来い」

「どこに行くの？」

「兄貴の所に行きお前を強くしてもらおう」

「そんなことが、出来るの!？」

「出来る!!」

また涙が出てきた
でも、これは悔し泣きじゃない
うれし泣きだ!!

戦闘準備！

安心院 side

はあくましか彼が殺られるとは、思いもしなかったよ
ちょっと期待しすぎたのかな？

まあ、いいや

それにしても、何だい？

あの裏フラスコ計画って

完璧にぼくの、フラスコ計画をパクッたろ

しかも、逆サ―ティーンパーティーもあれ完全にパクリだろ

少し、お仕置が必要みたいだね

ようし、決めた！

お仕置きとしてこのくだらねえ戦いをとっと終わらせるか

「お久しぶりですね安心院さん」

「！！」

「人を驚かせるなんて悪趣味だね」

「あははっ、すみません！」

「ところでお前・・・誰？」

「ひどいですよー安心院さん!!」

「自分は、黒田明^{くらためいじ}示です！」

「ああっ、そうそう！忘れてた！」

「ひどいですよー」

「そういえば、海外留学したと聞いたけど」

「はい！今、帰って来ました!!」

「あっ！これ、お土産です」

「いや、それはいいから」

「何で君がここに？」

「いや、恥ずかしながら弟がうまくやれてるかと思い」

「あゝ、弟君なら死んだよ」

「ああ、そうですか」

「あれ？どっかのマンガみたいにおもいつきし泣かないの？」

「ははっ！自分とつくに涙なんか枯れてるんですよ」

「そうかい、つまんないな」

「まだあるんだろ？」

「何がですか？」

「ここに來た理由」

「あれえゝばれちゃいましたか！」

「実はここに來た理由は」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ああ、なるほどね」

「分かった」

「はい、では失礼します」

面白い奴がまた1人來たな
さあて、この先どうなることやら

〽1週間後〽

綺羅瀬side

「はあ・・・はあ・・・はあ」

「よし！完璧だ！！」

「綺羅瀬さん、よく僕のトレーニングに耐えた！」

「お兄様、ありがとうございます」

「いやいや、かわいい妹の友達のお願いだからね」

「ところでめだちゃん！」

「はぐさせて〜！」

その瞬間、鮪^{まぐろ}さんがめだかさんに抱きついた

ガン!!

めだかさんは鮪さんをおもいつきり吹っ飛ばした

「ようし、では行くぞ!!」

「うん!!」

戦闘開始!

「まずこれからどうするの?」

「私に、考えがある」

「何?」

「まずその逆サートイーンパーティーとやらを倒すのだ」

「何で?」

「仙道1年生は、あの逆サートイーンパーティーに守られている」

「そいつらを倒して仙道を丸裸にする」

「でも、どうやって13人を相手にするの?」

「うむそれは、真正面から戦うのだ!」

「ふふっ、めだかさんらしいね」

「そうか？」

「うん」

「まあいい、とりあえず行くぞ！」

「うん」

仙道 side

生徒会室

つまらない・・・
すぐくつまらない・・・

エリートが集まる学校と聞いてここに来ましたが簡単に制圧できる
なんて

ここも、もう終わりですね

さてと・・・違う学校でも制圧をしますか

ミーは、席を立とうとした時、

ドン

ドーン

ん？

何の音ですか？

ボタン

ドアから、黒神さんとあの時の、お嬢さんがいた

「仙道1年生、貴様の負けだ」

「大人しくみんなを解放するのだ！」

「いいえ、まだ負けてません」

「ミーには、逆サートイーンパーティがいるのです」

その瞬間、逆サートイーンパーティが登場した

「ふん！そんな物このモードだけで充分だ」

「ほゝこれが、噂に聞く改心モードですか」

「おっと、黒神！」

「俺らも混ぜろ！！」

なっ！！

「おお！来たか雲仙風紀員長！」

「「「サーティーンパーティ登場！！」」」

くそ！

サーティーンパーティのことを計算に入れてなかった！
なゝんてね、本当は計算の内です

「黒神！ここは、俺らに任せろ！！」

「仙道は、お前らに任せたぞ!!」

「分かった」

「行くぞ! 綺羅瀬1年生!!」

「うん!」

黒神さんとお嬢さんがここに近寄ってきた

「すみませんが、場所を変えませんか?」

「なぜだ?」

「ここは、さすがに戦うにはせまいですからね」

「分かった」

「では、運動場にしましょう」

こいつ・・・なんでこんな時でも笑っていられるの？

「さあて、決着をつけますか？」

「そうだな」

「おっと！黒神さん」

「あなたと戦うのは、ミーではありません」

「全校生徒です!!」

「なっ!!」

「あっはっはっはっはっはっはっは!!」

「さくてと、決着をつけますか」

「そうするよ」

「エレクトリッククラッシュ
電体破壊！！！」

バジッ！！

「くっ・・・！！！」

私の、第二のスキル・・・エレクトリッククラッシュ電体破壊

私の体の中には、十万ボルトの電流が流れている
私は、相手に触らず電流を直接流すことができる

「さあ、これで終わりだよ」

バジジジジジジジジ！！！！！！！！！！

私は、思いっきり電流を浴びせた

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「確かにすごい威力ですね」

「!？」

「今のは、死ぬかと思いました」

「何で生きてるの？」

「十万ボルトも受けたら即死でしょ!!」

「確かに常人が受けたら確実に死んでいましたね」

「でも、ミーのスキル ショックレスボンデンス 衝撃対応 で防がせていただきました」

「このスキルは、いかなる衝撃、痛み、熱さ、寒さに体を保護させるスキルです」

「簡単に言うと、どんなスキルでもミーの前では無効になるってことです」

そう言うと、仙道君は私の首を絞めてきた

「く・・・・・・・・う・・・・・・・・」

苦しい!!

ごめん、黒田君

仇・・・とれなかった

「さようなら」

「何がさようならだよ!」

どこからか、聞き覚えのある声が聞こえた
その瞬間、仙道君が飛ばされた

「ごほ・・・・・・・・ごほ」

「大丈夫か綺羅瀬」

え?

まさかだよね

「よお! どうした? 鳩が豆鉄砲くらったような顔して」

「オレだよ、オレ！」

「黒田暗示だよ」

復活

黒田 side

「え？夢じゃないよね」

「夢じゃなねえよ」

「でも・・・死んだんじゃ」

「ああ、確かにオレは死んだ」

「じゃあ、説明しようか！」

「オレの復活劇を」

「くそ！オレはもうダメなのか！？」

「うん、だめじゃない？」

「そんな、はっきり言わなくても・・・」

「終わった人生に未練なんか残すなよ」

「これから、新しい人生が待ってるんだぜ」

「でも、オレにはやり残したことがあるんです！」

「ほううなんだい？」

「友達を救いたいです！！」

「友達じゃなくて恋人の方が合ってるんじゃないのかい？」

「・・・」

オレは、自分の本心をバラされて急に顔が熱くなった

「冗談だよ」

安心院さんは、微笑みながら言った

「さあ〜てと! どうする? 生き返らせない訳でもないけど?」

「本当ですか?」

「ああ、本当だよ」

「お願いします!! オレをどうか生き返らせてください!!」

「別にいいけど条件が一つ」

急に安心院さんが真面目な顔で言った

「何ですか?」

「必ず仙道君を倒すんだよ」

「はい！」

「じゃあ、いくよ」

「あっ！ちょっと待ってください！！」

「ん？なんだい？」

「こちらも一つお願いが・・・」

「なんだい？言ってみな」

「実は・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・・・・・・・・」

「お前、馬鹿じゃねーの？」

「でも、どうしても必要なんです！！」

「分かったよ・・・」

「ああ、そうそう！君が死んでからもう1週間が経つから死体の腐敗が進んでると思うから直しておいてあげるよ」

「ありがとうございます！！」

「じゃあ、お別れの・・・チュウ！」

その瞬間、オレは気を失って
気づいたらポースマイナス十三組の教室に寝込んでいた

「ということだよ！」

「まさか、安心院さんが・・・」

「あのくそババアが関係してたんですか」

「おいおい、どうしたんだ？ 口悪いぞ」

「おっと！ ミーとしたことがつい暴言を吐いてしまった」

「それに、蘇ったならまた殺してやりますよ」

「ディシーズエロージョン
病原侵食！！」

「!？」

綺羅瀬 side

「あはははははっ！ ミーの第二のスキルです！！ このスキルは、

ミーの体の中にある無数の菌をばらまくんですよ！もちろん、治すことも不可能！この場にいる全員を殺してやりますよ！」

くっ・・・苦しい

体が・・・重い・・・！

め・・・目まい・・・が！

「お前・・・仲間も一緒にか？」

黒田君は、平然と立ちながらすごい目つきで言った

「な・・・何で立っていられるんですか！」

仙道君の笑顔が消え驚きの表情に変わった

「いいから、答えろ」

「仲間？あれはただの捨て駒です」

何で？

あの人達仲間じゃないの？

その時、黒田君が落ち着いた様子でこう言った

「そうか・・・」

ドス

その瞬間、巨大な螺子が飛んできて仙道君を貫いた
え？

何が起ったの？

私は、球磨川先輩？と思い螺子の飛んできた方向を見た
しかし、違った

飛ばしたのは・・・黒田君だった

黒田君は、落ち着き払った様子でこう言った

「仲間をそんな風に言うなよ」

決着

黒田 side

「ぐはっ！あなた・・・人を殺すつもりですか？」

「大丈夫だ、急所は避けた」

「何で・・・君が・・・この螺子を？」

（25分前）

2年マイナス十三組前廊下

「あれゝさっきからのすごい音が聞こえるけどどうしたのかな？」

『それは、サーティーンパーティと逆サーティーンパーティが派手に戦ってるんだよ』

「!!」

「球磨川先輩! 驚かさないでくださいよ!」

『ごめんごめん、驚かせるつもりはなかったんだけどね』

「何で球磨川先輩がここに?」

『僕は、ちょっと飯を返しに来ただけだよ』

『そんなことより、君も何でここにいるの?』

「オレも、飯を返しに来ました」

『そうかい、ならこれを持ってくといいい』

「これは?」

『これは僕が、愛用している螺子だよ』

『護身用に持って行きなよ』

「いいんですか？」

『ああ！だって僕のかawaiiかわい後輩だからね』

「ありがとうございます！！」

という訳だ

「あそこで、球磨川先輩に会うなんてラッキーだった」

「なるほど、そういうことだったんですか」

「でも、だから何です？」

「たとえばミーが死んでも菌はどんどん侵食していきます！」

「なぜか、君は平気みたいですけどそのお嬢さんはもうだめみたいですよー！！」

「ご……めん」

「あ……し……ひっぱ……ちゃ……って」

「大丈夫だ」

オレは、綺羅瀬の頭に手を置いた

「あれ？……苦しくない」

「なっ!!! どういうことです!?!」

「おゝ本当に出来てるね」

「これは、一体」

「安心院さんに1つだけスキルを貸してもらった」

「昔、球磨川先輩が所有していたスキル」

「ま・・・まさか・・・!!」

「そうだよ」

「この世の中で最もマイナスで最も最悪なスキル」

「大嘘憑き（オールフィクション）!!!!」

仲間の作り方

「なぜ・・・あなたがそのスキルを!?!」

「くどいぜ! 仙道君」

「だから言っただろ、安心院さんから借りたって」

「くっ・・・!」

「しかし、代償としてオレの異常・・・パラレルズノウ異世界知と天の邪鬼パーバルシテイを失った」

「あなた・・・バカですか?」

「それ・・・安心院さんにも言われたよ」

オレは、笑顔で言った

「でも、惚れた女のためなら惜しくないね」

チラッと紀羅瀬を見たら呆然とオレを見ていた
そんな紀羅瀬に思いっきり笑いかけた
その瞬間、紀羅瀬の顔が赤くなった
再びオレは仙道を見た

「仙道・・・」

「・・・何ですか」

「仲間はどうかやってできると思う？」

「そんなもん・・・知りませんよ」

「そうか・・・」

「オレが思うには、助け合いから生まれると思う」

「・・・」

「確かお前は、他のポースマイナス十三組はただの手駒だと言っ
たな？」

「それが何です？」

「じゃあお前・・・仲間いるのか？」

「・・・！！」

「オレも昔、仲間なんていらなかった」

「しかし、ある人が気づかせてくれたんだ」

（お前の良いところは、「強さ」だ！その「強さ」で弱い人を救ってやれ！そしたら、仲間ができる！）

「それで、目が覚めた」

オレは、仙道君に刺さったネジを抜きながら言った

「自分にも仲間が作れるんだと」

「・・・」

「なあ仙道」

「オレの仲間にならないか？」

「・・・!!」

「まあ、お前が望むならだけど」

「どうする？」

「・・・いますか？」

「ん？」

「今から・・・でも・・・間に合いますか？」

体を震わせ仙道君は言った

「ああ！間に合うさ！」

その瞬間、仙道君はオレに抱きつき泣いた
今まで寂しかったようだ

オレの胸の中でまるで赤ん坊のようだ
オレは、優しく仙道君を抱きしめた
しばらく経って仙道君は泣き止み「戦いを止めさせに行く」と言っ
て生徒会室に行った

「ようし！これにて一件落着！」

「黒田君・・・！」

紀羅瀬が顔を真っ赤にして言った

「何？」

「さっきのことなんだけど・・・」

「ああ！さっきオレがお前のこと好きと言ったことか！！」

紀羅瀬が頷いた

「それが何？」

「いつから私のこと・・・好きになったの？」

「それh「やあやあ諸君！元気してるかな？」」

「あ・・・兄貴！？」

「お兄さん！？黒田君、お兄さんがいたの？」

「うん・・・バカ兄貴だけど」

「あれ？暗示その女の子は？」

「もしかして・・・恋人か？」

その瞬間、また紀羅瀬の顔が赤くなった
そして、オレも赤くなる

「ほほう」

オレは、この空気に耐えられなくなり別の話にした

「何でここに？ 確か海外留学してたはずじゃあ・・・」

「終わったから帰ってきた」

なんじゃそりゃあー！ー！！

「ああ！ 後、今日から一緒にお前と住むからよろしく！」

「

これは、終わりじゃない始まりだ

「えーーーーー!!!!!!」

「まあ、よろしく!!」

「よろしくじゃなーーーーい!!」

「ところで暗示」

「何だよ・・・」

「仙道がまいた菌、まだ大嘘憑き（オールフィクション）で全部なかつたことにしてないだろ」

「あっ!忘れてた!!」

危ねえゝ危ねえゝ

危うくみんなを殺すところだった

しかし、一つの疑問が浮上した

あれ？何で兄貴が仙道が菌をばらまいたことや大嘘憑き（オールフイクション）のを知ってるんだ？

「兄貴、何でそんなこと知ってるんだ？」

「さあ・・・何でしょう！」

「・・・」

「それよりも早くなかったことにしないと、みんな死ぬぜ」

「う・・・うん！」

オレは、急いで菌をなかったことにした
そして、オレはまた兄貴に問いただそうとした
しかし、そこには兄貴の姿はなかった

「綺羅瀬、兄貴は？」

「あれ？どこに行ったんだろう・・・さっきまでここにいたのに」

明治side

時計塔の屋上

「ふうゝ危ない危ない」

「あともう少しで僕の、正体がばれるところだったよ」

「すまんな暗示、こっちにも事情があるんだよ」

「別に正体をばらしてもいいんじゃないのかい？」

突如、安心院さんが僕の後ろに現れた

「うお！びっくりした！！」

「あの時のお返しさ」

「どうしてここにいるんですか？」

「いや〜ね暗示君に貸し与えた大嘘憑き（オールフィクション）を
どのように使うか見に来ただけだね、さすが君の弟！全然おもしろくないね！！」

「そうですか・・・」

全く！

人の弟を何だと思ってるんだ？この人は・・・

「安心院さん・・・」

「なんだい？」

「仙道をけしかけた奴はどこのだいすか？」

「・・・もちろん不知火君だよ」

「いや、理事長さんはただ仙道の心の火をつける為の炭だ」

「火種になった人物がいるはずだ」

その瞬間、安心院さんが諦めたような顔してこう言った

「ああ、そうだよ」

「不知火君は、仙道君を引き入れるためのきっかけ」

「仙道君の、あの邪悪に満ちた心に火を灯したのは●▲■▼●◆ち
やんだよ」

「なっ！彼女が！！」

「そう！暗示君にとっては忘れたいよね」

「だって、彼女は暗示君の実の両親を殺したんだからね」

プロローグ（前書き）

プロローグ書いてみました。
楽しんでもらえると幸いです

プロローグ

黒田暗示5歳

いつも1人で外に遊びに行っていた暗示

ある日、急に外が暗くなり急いで家に帰った

家に帰った暗示はいつもと違う家の雰囲気気づいた

玄関には、知らない子の靴が置いてあり廊下を進むと何か足にあたった

下を見てみると人の腕が置いてあった

5歳の暗示は、これが何なのか理解できないためそのままリビンググに行った

その時、

グシャ・・・グシャ・・・

「ふっふっふ〜ん♪楽しいな〜色々えぐるの楽しいな〜」

グシャ・・・グシャ・・・

知らない女の子が仰向けの暗示の母のお腹に乗って何かやっていた

暗示は何をやっているのかと思いい近寄ってみた

その時、床がギギィーと大きくきしんだ

少女は、手を止め暗示の方に振り向いた

その少女の特徴は、

青色の髪

目が茶色

身長は、暗示より少し小さい

ピンクと赤色が混ざったワンピースを着ていた

その少女の横を見ると血まみれで大腸が引きづり出された状態の変わり果てた母の死体

手には、血まみれの中華包丁が握られていた

そして、少女は血まみれな手で黒田の頬に触り微笑みながらこう言った

「あなたここの家の子？」

「・・・」

「そっかー何もしゃべれないんだね！」

「・・・」

「かわいそうなかawaiiそうな黒田くん♪」

「・・・」

「そんなかわいそうなかawaiiそうな黒田君にはこのスキルあげちゃう♪」

「・・・！」

その少女は、黒田の額に自分の額を当てた

「もしも、困った時があったらそれを使うといいよ！」

「・・・」

「じゃあ、11年後また会おうね」

「あ〜ん〜じく〜ん♪」

「・・・！」

少女は、そう言うとき家から出ていった

その後、暗示は恐怖で足がすくみ座り込んでしまった
そして、彼は泣いた

あの得体の知れない者に

〽11年後〽

「やっとこの時が来たね」

「あゝんゝじくゝん♪」

恐怖は迫ってくる・・・

やって来た・・・

暗示 side

オレは何か違和感を感じながら起きた

まさか・・・と思い布団をめくってみると

やっぱり裸の綺羅瀬だー！ー！！

何で毎度毎度こいつがオレのベットに現れるんだ・・・？

ちよっとうれしいけど・・・

とりあえずこいつを起こさなければ

「起きろ綺羅瀬！そして、服を着ろ！！」

「うゝん・・・後5分」

もうめんどくさいのでオレは、綺羅瀬の頬に軽くビンタした

「イタッ！ひどいよゝ暗示君ゝ！」

「お前が早く起きないからだよ！それに何で名前で呼ぶんだよ！」

「えゝだって私達恋人同士でしょ！暗示君も私のこと真意って呼んでよ！」

「断る！」

「えゝ！」

「とりあえず早く制服に着替えて飯食えよ」

「はゝい」

なぜ綺羅瀬が普通に家にいるのかというと
綺羅瀬がオレの母さんにここに住まわせてもらうよう頼んだところ
なんと、許しが出た！！

綺羅瀬は大喜びだった

そして、母さんもなぜか喜んでいたようだ
うゝん・・・謎だ

オレは、リビングに行き飯を食べていた
その時、母さんが

「暗示、いい人見つけたね!」

飯を食っていたオレは、噎せた（むせた）

「^ぐほ^ぐほ^ぐほっ!・・・^ぐほっ・・・^ぐほっ・・・」

「いっ・・・たい・・・なん・・・のこと?」

「とぼけちゃって!真意ちゃんは暗示の将来の花嫁なんですよ?」

「なっ!あいつ・・・」

「2人はいつ出会ったの?」

「^ぐちそうさま!」

オレは、母さんの質問を無視し急いで制服に着替えて歯を磨き、学校に行った

その道中オレは、ずーとため息ばかりついていた
はあゝ何でこんな事に・・・

「おはよう！暗示！！」

ん？この声は・・・

「朝から熱いね〜君達は」

バカ兄貴だった

「うるさい」

オレは、昔から兄貴のこういうテンションが大嫌いだった

「何だよつれないな〜」

「あまりしつこいと兄貴の存在なかったことにするよ」

「分かった分かった」

その時、

「暗示く〜ん！」

また誰かがオレに声をかけてきた
まあ、本当は誰かは分かったがな

「やっと追いついた！」

綺羅瀬だ・・・

「おっ！将来の花嫁登場だね〜」

「ひどいよ暗示君！置いてくなんて・・・」

「悪いな、母さんがしつこく聞いてくるんだよ」

「何を？」

「オレとお前のこと」

「やだゝ義母さん（おかあさん）たら」

もうそういう風に呼んでるよ・・・

気が早いだろ

疲れた・・・

あゝもうツツコミすらできない・・・

そんなことを話していると学校に着いた

疲れたから今日は授業さぼって保健室に行くか

第三者 side

理事長室

そこには理事長と●▲■▼◆●が席に座って話していた

「やっとここにたどり着きましたよーあたし方向音痴なもんでき」

「それなら、誰かにお聞きになったらよろしかったのでは？」

「あはははっ！聞いたんですけどね、みんな何を言ってるのか分からないので、あたし1人で来ました」

「そうですか・・・」

「はい、そうなんですよ！」

「では、面接としてここに来た理由を教えてくださいましょうか」

「えーとね、暗示君がいるからかな？」

「あなたが、最近夢中になってるものは何ですか？」

「人のかいぼーです!!」

袴は思ったであろう

この子の異彩を放つオーラは間違いなく過負荷だと

「分かりました・・・合格です」

「やったー!!」

「では、明日から2年マイナス十三組に通ってください」

「はい! あっ、そうそう!! 今日、学校見学して行っていいかな?」

「別に構いませんが」

「ありがとうございます!じゃあね!!」

「はい・・・では、また明日お会いしましょう」

彼女が廊下に出た時、それはたくさんの人が倒れていた

これは、みんな●■▲▼◆●を道案内した生徒達だった

「ふっふっふーん♪人を殺すのたのしくなるとのしくなるとの♪」

彼女は、自作の歌を歌いながら学校見学しに行った

再会

暗示side

キンコン カーコン

保健室に寝ていたオレは、チャイムの音で目覚めた
ふあゝあ、授業が終わったか・・・

よし！じゃあ、帰るか！

オレは、保健室を出てポースマイナス十三組の教室に向かっていた
その時、

「ねえねえ、そこの君」

誰かがオレに話しかけてきた

「はい？」

オレは、振り向いた

ドクン・・・ドクン・・・

あの青い髪は・・・

あの茶色の目は・・・

オレは、この時の感覚を覚えている

この恐怖や絶望感に満ちた感覚・・・

何でここにいる？

「……どう？」

あいつだ……！

「こ……ここは、ポースマイナス十三組の廊下です」

悟られちゃだめだ！

こいつと関わっちゃだめだ！！

オレは、心の底から思った

「そうなんだくありがとう」

「……いえ」

オレは、急いでこの場を立ち去ろうとした

「ねえ、黒田暗示君……知ってるかな？」

背筋が凍った

何で今も覚えてるんだ！？

まずい！

こいつにだけは、オレの正体を知られちゃだめだ!!
オレは、振り返って言った

「いえ・・・知りません」

そう言うときあいつは笑って言った

「嘘だよ」

ドクン・・・

「君がここにいるということはポースマイナス十三組なんじゃないのかな？」

ドクン・・・

「あっ!もしかして黒田君？」

ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!
ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!ヤバイ!

ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ!
イ!

「いえ・・・違います」

オレは、そう言ってこの場を急いで離れようとした

「黒田君みくつけた」

なっ・・・!

オレは、振り返った

その瞬間、あいつはオレに抱きつきキスをした

「・・・!!」

「あはははっ! 11年ぶりだねあ〜んじく〜ん♪」

「・・・何しに来た！」

「ん？君に会いに来たんだよ！」

「何でオレに会いに来たんだよ！」

「好きだからかな？」

「なっ！！」

「何であの時、あなたを殺さなかったか知ってる？」

「何でだよ」

「あなたに一目惚れしたから♪」

嫉妬

何だよ・・・こいつ

あの時、オレを殺さなかったのはオレに一目惚れ？

分からない・・・こいつの考えてることが分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

分からない分からない分からない分からない分からない分からない

「ねえ、あたしと付き合って！」

「・・・!!」

「あたし黒田君のために色々出来るようになったよ！」

「料理とかお掃除とかいつでもお嫁に行けるよ！」

こいつの気の早さは・・・綺羅瀬と同じ！いや、それ以上か！
ていうか、何で親の仇のこいつと結婚することになってるんだ！
とにかくオレには綺羅瀬という心に決めた人がいるんだ！

「悪いけどオレには付き合ってる奴がいるからお前とは付き合えない」

あいつは、衝撃を受けたような顔をしていた
オレは、「じゃあな」と言い教室に行った
これで良かったんだ・・・これで



誰・・・？

あたしの黒田君を奪ったのは・・・
許さない！

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す

殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺してやる！！

待っててねー黒田君！
すぐにそいつをブツ殺してあたしだけの物にしてあげる！

「ふふゝんふふゝんコロスゝコロスゝ♪」

第三者 side

ポースマイナス十三組教室

暗示は、体を震わせながら教室に入ってきた
その様子に最初に気づいたのは綺羅瀬だった
綺羅瀬は、暗示に話しかけた

「どうしたの？暗示君・・・」

暗示は、思った
もしも、今あったことを綺羅瀬に教えたらあいつに会いに行き殺さ
れると

それだけは嫌だ！

もう二度と大切な人を失いたくない・・・

「何でもない・・・」

暗示は、笑って言った

「ふうん」

綺羅瀬は暗示の様子がおかしいので心読み（メンタルリード）を使った

何？あいつって・・・

殺される・・・？

何を言ってるの？

何か困ってるなら、お互いに解決しようよ！

私達、恋人どうしでしょ！！

綺羅瀬はそう思った、そして何も言わず自分の席に戻って行った次に、黒田の異変に気づいたのは仙道だった
仙道は、暗示の所に来てこう言った

「大丈夫ですか？」

暗示は、今にも泣き出しそうな位涙目だった
その様子に少し驚きながらも仙道はまた同じ質問をした

「ああ、大丈夫・・・」

大丈夫じゃないでしょうが・・・

一体暗示君に何が・・・

ん？待てよ・・・

この光景・・・どこかで・・・

・・・そうだ！昔のミーに似ているんだ！

仙道は、めずらしく怒ったように言った

「暗示君・・・ミー達は仲間です！困った時はみんなで悩むのが大切だと思います！！」

しかし、暗示の様子は変わらない

仙道は諦めて自分の席に戻って行った

ホームルームが終わりみんなが帰宅しようとした時、仙道は綺羅瀬の所に行って、あることを聞いた

「暗示君・・・何か様子がおかしいんですけど、どうしたんですか？」

「それが・・・私にもよく分からないの」

「そうですか・・・」

「でも・・・」

「でも・・・？」

「あの様子からして暗示君は・・・何かから恐れてると思うの」

「何かから恐れてる？」

「うん・・・」

仙道はその言葉を聞いて、まさか・・・と思った

「綺羅瀬さん、ありがとうございます」

「えっ・・・？うん」

綺羅瀬は、義母さんの手伝いで早く帰った

他のポースマイナスもみんな帰った

残ったのは暗示と仙道だけ

仙道は、そっと暗示に近づく

暗示は、いまだに震えながらイスに座っていた

「なぜ、そんなに震えているんですか？」

「ちょ・・・っと・・・風気味・・・なんだ」

暗示は、笑いながら言った

それを見た、仙道は真剣な顔で言った

「あなたは、ミーを仲間だと言ってくれた。なら、ミーに話してくれませんか？」

「・・・」

それでも答えない暗示に仙道は囁いたささや

「・・・たんですね」

その言葉を聞いて暗示は反応した

「仙道？いま・・・何て・・・？」

「彼女に会ったんですね？」

「えっ・・・？」

その時、誰もいない教室に暗示の音が響いた

嫉妬（後書き）

ヤンデレに近いキャラを出してみました
ちよつと、オリキャラを出しすぎてるかもしれませんが、ご了承ください

恐怖と怒り

暗示 side

何で・・・分かったんだ・・・？
いや・・・とりあえずここはとぼけて・・・

「何のことだ・・・？」

オレは、笑って見せた
それを見た仙道は体を震わせながら言った

「・・・とぼけないでください！ミーも彼女に会って恐怖を植えつけられたことがあるんです！！」

なっ！こいつも！？

「何でミーはここに来たと思いますか？」

「ただの親の都合とか・・・？」

「違います。本当は・・・」

仙道は、なぜかそこで止めた
そして・・・心の準備が出来たようで口を開いた

「あの人にここの学校を教えてもらったからです」

「えっ・・・？」

嘘だ・・・！

「そして・・・ミーは、あの人に・・・暗示君を可愛がってあげて

と言われたんです・・・」

仙道がここに来たのは・・・あいつが関係してたのか・・・！
あいつ・・・何でそんなに・・・オレに執着してるんだ！
その時、仙道が悲しい顔で言った

「すみません・・・隠すつもりなかったんですが・・・」

「いや・・・オレの方こそ隠しててごめん・・・」

「ミー達、ポースマイナス十三組は暗示君の仲間です！心配しないでいいんです！」

あれえ～おかしいな～目から何か熱いものが・・・
気づいたら涙が止まらなくなっていた

「はあ～何かスッキリした気分です！！」

「暗示君！一緒に帰りませんか？」

「ああっ・・・先に行っていてくれ・・・後から・・・オレも・・・行く」

「分かりました！じゃあ、下駄箱で待ってますんで・・・では、また後で！」

その後、オレは思いっきり泣いた

オレは、一年分位？泣いた後、急いで仙道のいる下駄箱に行ったふう〜スッキリした！

心の中の恐怖もいつの間にか消え・・・た・・・し

「ふふふ〜んふふふ〜ん♪楽し〜な楽し〜な殺すの楽し〜な♪」

あいつだ・・・

あいつは何かに乗っかって中華包丁を振り上げたり振り下げたり繰り返していた

「な・・・何やってるんだよ」

あいつは、体中血まみれで振り返って言った

「あっ！暗示君！！実はね、質の良い食材を見つけたからさばいてるんだよ！」

こいつの下を見ると人が倒れていた
よく見てみると・・・せ・・・仙道？

「おまえ・・・仙道を・・・？」

「あっ！気づいた？そうだよ！仙道君！！後ね・・・ここにもいっぱいあるよ！！！」

あいつは、指をさした

オレは、指をさした方向を見るとポースマイナス十三組全員の死体が並べてあった

なっ・・・何だよこれ！

まさか・・・綺羅瀬も？と思いその死体を順番に見てみると・・・
変わり果てた綺羅瀬の死体が横たわっていた

オレは、綺羅瀬の死体を見た時、恐怖より怒りがこみ上げてきた

「おいっ！ まだお前の名前を聞いてなかったな・・・」

「あっ！そうそう！忘れてた！！」

「あたしの名前は、しだいふり四大不利！よろしくね」

不利はへらへらと笑いながら言った

こんなふざけた奴にオレの仲間や恋人まで殺されたのか!!

許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない

オレは、震える手で綺羅瀬のお腹に手を置き死をなかつたことに・・

もちろん、他のポースマイナス十三組や仙道も……

「あれえ？何で元に戻しちゃうの？」

「
・
・
・
せえ
」

「ん？」

「うるせえー！　！！！！！」

」！

その瞬間、オレの意識は途絶えた

綺羅瀨
S i d e

うーん・・・あ・・・れ？わ・・・たし・・・いつ・・・たい・・・
私は起き上がって周りを見ると・・・
ポースマイナス十三組のみんながいた
え？みんなどうしたの？

みんなは、一斉にある場所を見ていた
私もみんなが見ている所を見た

そこには、上半身裸で髪が長くて体に模様みたいなものが付いた男の人が立っていた

その男の人の真下にはさつき私を包丁で刺した女がうつ伏せで倒れていた

「気が付きましたか」

仙道君が話かけてきた

「一体何がどうなってるの？」

「ミー達は、あの女・・・いや・・・四大さんに殺されたんです」

「その時、黒田君が大嘘憑き（オールフィクション）でミー達を助けてくれたんです」

「え？黒田君が・・・？」

「はい・・・」

「それじゃあ黒田君はどこ？」

その瞬間、仙道君が下を向いた

「黒田君は・・・」

「どうしたの・・・？」

「あの・・・落ち着いて聞いてください」

その言葉を聞いて私は急に心配になった

仙道君は、あの体中に模様のある男の人を指差して言った

「あそこに立っているのが黒田君です」

黒神モード

第三者 side

中学の時、黒田暗示ははじめを受けていた

だが、彼は何も言わず、何も答えず、ただやられるがままだった
しかし・・・ある時、いじめをしていた生徒が暗示の親の唯一の形
見であるカバンを川に投げ捨てた

彼の心の中は怒りと言う感情でいっぱいになった

その瞬間、彼の体に変化が現れた・・・

髪が一気に地面にまで伸び始め体はどんどん筋肉質になっていき体
に鎖みたいな模様が現れた

それが、最初に黒田が暴走した瞬間だった

綺羅瀬 side

「あれが・・・黒田君・・・？」

「はい・・・」

「いやゝ驚いたよ！まさにこれは『黒神モード』だね」

「「!」」

白い髪の人で体中に螺子が打ち込まれた人が私の横に現れて言った

「あなたは誰ですか？」

「やあ！初めまして！ぼくの名前は安心院なじみ、親しみをこめて安心院さんって呼びなさい」

「じゃあ、安心院さん・・・黒田君に一体なにが・・・」

「彼は、大切な物を守るために自分で抑えていたもう一人の自分を解き放ったんだよ」

「もう1人の自分？」

「そう！簡単に言うと彼は二重人格なのかな？」

「二重人格・・・って確か・・・一つの体に2人の性格が宿っているというあれですか!？」

仙道君が驚いたように言った

「そうだよ・・・黒田君の心の中には平和的な人格と破壊衝動を好む人格があるんだよ」

「・・・!!」

あの黒田君が・・・!

「メインは平和的な人格だけど、大切な物を傷つけられると破壊衝動を好む人格が現れるんだよ」

「・・・」

「まったくうゝ怒りで覚醒するなんてジャンプだけにしてほしいもんだねゝ」

安心院さんが言った瞬間、

ドサッ

黒田君が倒れた

私は、急いで黒田君の所に駆け寄った

その時、髪が短くなり、模様が消えて体は元に戻り始めた
私は、必死に黒田君の体を揺り動かして名前を呼んだ

「黒田君！黒田君！」

どんなに動かしても起きない

「黒田君を早く保健室に連れて行きましょう！！」

仙道君が大きな声で言った

第三者 side

ポースマイナス十三組生徒全員が黒田を保健室に連れて行ったちよ
うどその頃

「うれしいよー黒田くーんあたしのあげたスキルを使って痛めつけ
てくれるなんてー」

何事もなかったかのように起き上がる四大不利

「きっとこれは、愛のムチなのねえー！」

両手を頬に当てて幸せそうな笑顔を見せる四大不利

「ららーんららーん♪やったーあたしのスキル使ってくれたー♪」

それを言いながらスキップしてどこかえ消えていった

もう1人の自分

暗示 side

「おい・・・おい！起きろ！！」

オレは、聞き覚えのない声で目覚めた
辺りを見ると真っ暗だった

「・・・ここはどこだ？」

「ここはお前の心の中だ」

「！！」

すうーと仮面を被った奴が現れた
そいつの特徴は、

筋肉質で髪が長くて、なぜか上半身裸でその体には鎖みたいな模様が
あった

誰だ・・・こいつ・・・

全く見に覚えがない

オレは、動揺しながら聞いた

「あの・・・どちらさん・・・？」

その瞬間、仮面の男は怒ったように言った

「お前！！ずーと一緒にいたのに俺様のこと知らないのか！！」

「え・・・すいません・・・」

つい謝ったが・・・本当に誰だ？・・・こいつ
その時、仮面の男は右手で頭をポリポリ掻きながら左手でオレの方に指を差してこう言った

「俺様は・・・お前だ・・・」

は？何言ってるんだこいつ・・・

「俺様の言ってることが理解できてないようだな〜じゃあ、証拠を見せてやるよ」

仮面の男はそう言うと言分の仮面を外した
なっ！

こいつの顔は・・・オレ・・・？
オレのそっくりさんが不気味な笑みを浮かべながら言った

「これで・・・信じてくれたよな？」

「・・・ああ」

「ははっ！まあ、そんな難しい顔するなよ！」

こいつ・・・オレ以上に気さくだ！！
いかん！肝心なことを聞かなくては！！

「ところでオレは何でここにいる？」

オレのそっくりさんは、顔をしかめながら言った

「お前・・・覚えてないのか？」

「・・・うん」

オレのそっくりさんは、はあくため息をついて言った

「お前の仲間が四大にぶっ殺されて、それを見たお前は頭にきて俺様を呼んだんだよ！！」

「オレが・・・！？」

「そうだ・・・そして、四大をボッコボッコにした俺様は、お前の意識をここに呼び寄せた」

「何のために？」

その瞬間、あいつは微笑みながら言った

「お前を殺すため・・・」

「・・・!!」

「生涯こんな暗い場所で過すなんて御免だね！」

こいつ・・・もしかして・・・

「だからお前を殺してこの体は俺様が乗っ取ってやる!!」

オレと・・・同じか・・・!

こいつは、仲間も親も恋人もない・・・誰とも話せないでずーと
1人・・・

「・・・いいよ」

「!？」

「お前は、寂しかったんだな・・・辛かったんだな・・・誰とも話
せず、ずーと1人。オレは、恋人や仲間・・・色々な物を手に入れ
たのに・・・お前はこんな寂しい人生を送っちゃいけない!!」

「!!」

「だから・・・オレは、お前に殺されたって構わない!!!」

気づくとオレは泣いていた・・・
不意にあいつの顔を見ると・・・あいつも・・・泣いていた

「そんなこと・・・言われたら・・・殺せねえ・・・じゃないか・・・！」

オレは、あいつに近づき・・・抱きしめて言った・・・

「・・・ごめん」

「暗示・・・俺様は・・・お前を・・・敵として・・・見てたが・・・
いい奴だな・・・！」

「あははっ！よく言われるぜ!!」

すると、あいつは・・・病人みたいに息が荒くなってこう言った

すると、目が覚めた

何か手に違和感があり横を見ると綺羅瀬がオレの手を握りながら寝ていた

オレは、いつの間にか保健室に運ばれていたらしい
すると、保健室から誰かが入ってきた

「あっ！目が覚めましたか！！」

仙道だった

その声に綺羅瀬は起きた

そして綺羅瀬はオレが、目を覚ましたのを見て抱きついてきた

「黒田君黒田君黒田君!!」

「く・・・苦しい・・・」

「あっ!ごめん・・・」

死ぬかと思った・・・

「あれ?他のポースマイナス十三組のみんなは?」

「ああ!彼らならもう帰りましたよ!!」

「そうか・・・あっ!四大は?」

仙道は、暗い顔で言った

「あの人はいなくなっていました」

「えっ？」

「黒田君を保健室に運んだ後、下駄箱に行ってみたんですけど……
いなくなっていました」

あの……『黒神モード』？を食らってまだ動けるとは……
まあいい！！あいつがまた事件を起こしそうになったらオレが止めてやる！！

オレは、ベットから起き上がり言った

「……仙道」

「何でしょう？」

「裏生徒会を作るぞ!!」

もう1人の自分（後書き）

ある事情がありまして、しばらくの間投稿が出来なくなります
読者の皆様、申し訳ありません

裏生徒会（前書き）

すみません！少しでもお休みをできてしましまして・・・
今日は時間に余裕が出来たのでご覧になってください

裏生徒会

「裏生徒会・・・ですか？」

仙道は顔をしかめて言った

「ああ、そうだ！」

「何で裏生徒会なんて物を作るんですか？」

「四大を改心させるためだよ！」

「!？」

「いいか？あいつは、過負荷だ！まともにかかって勝てる相手じゃない!!！」

「しかし、裏生徒会を作る前に本物の生徒会を頼ったらどうですか？」

「確かに、黒神は過負荷の中の過負荷、球磨川先輩を改心させた！」

「でも、黒神じゃ無理だ!! 四大は・・・ただの過負荷じゃない!」

「どういふことですか?」

仙道は、食い入るようにこちらを見て言った

「あいつは・・・異負荷だ!!」

「なっ・・・! 何ですか? それは・・・」

仙道は、驚きと共に興味を持ったように聞いてきた

「あいつは・・・異常な程に過負荷なんだよ」

仙道は、頭に?を出していた

「説明すると、マイナスにもやることに関しては限度って物がある。しかし、あいつの場合その限度を大きく超えてるんだ!!」

「なるほど・・・」

納得したように仙道は下を向いた
すると、

キンコンカーコン キンコンカーコン

下校完了のチャイムがなった

「じゃあ、ここいらで解散するか！」

「黒田君！」

「ん？」

仙道が、目を輝かせて言った

「分かりました！作りましょう裏生徒会！」

「ああ！まあ、四大を改心させるためだけの間だけだな」

そして、オレ達は解散してそれぞれの家に帰った

第三者 side

ちょうどその頃、本物の生徒会では事件が起きた
また、何者かの襲撃を受けたのである

人吉善吉と阿久根高貴と喜界島もがなは倒れ、残ったのは黒神めだ
かと球磨川禊であった

その時、襲撃者は言った

「おいおい！一度襲撃受けたなら次何があってもいいように身構える準備をしとけよ！」

その時、黒神めだかが言った

「貴様！！なぜ私達を襲う！！」

黒神めだかは乱心モードになり、言った

「理由なんてないさ」

その時、めだかは「貴様あゝ！！」と言い、襲撃者に右ストレートを食らわせる

襲撃者は、乱心モードのめだかの右ストレートを片手で止めていた

「乱心モードってのは、ただたんにギャーギャ、ギャーギャ騒ぐた
めのものか？」

襲撃者は、自分の右腕を高く上げ黒神の腕に振り下ろした

ゴキッ

この音が生徒会室に響いた

襲撃者は黒神を殴り飛ばして球磨川の方にまで飛んで行った

『めだかちゃん・・・大丈夫?』

球磨川は、へらへら笑いながらめだかを見下ろす

「ああ!大丈夫だ!!」

黒神は立ち上がり折れて曲がった右腕を力ずくで元に戻した

「おゝたいした根性だ!しかし、もうお前等と遊ぶ気がなくなった。
じゃあ帰るは・・・」

『うん!またね!!』

球磨川はいつも通りの笑顔で言った

襲撃者が後ろを向いて去ろうとした時

「おい!貴様!!名を名のれ!!」

めだかが言った

「それは教えられないただ、ヒントを出すならば・・・いつも弟がお世話になってまーす!!」

「なっ!」

そう言って襲撃者は消えて行った

めだかの心の中には、襲撃者が言ったあの最後の言葉に疑問を感じていた

「いつも弟がお世話になってます? ということだ・・・」

めだかは、そう呟くと善吉達を保健室に連れて行った

? side

「さて、うまく事は運んでいるな! 後は、観察するだけ!」

「やあ、どうだい！順調かい？」

その時、後ろから声が聞こえた

振りかえってみるとそこには、安心院さんがいた

「はい、うまくいってますよ安心院さん」

「そうかいそうかい、なら良かったよ」

「でも、いいんですか？フラスコ計画をやっているのに僕の計画を手伝っちゃったりして！」

「ああ！大丈夫！君の計画なんてその気になれば簡単に潰せるさ！」

「簡単に潰せるなんてひどいじゃないですかあゝ」

「そういえば、君の計画の名前・・・忘れたから教えてくれないかな？」

安心院さんは笑顔で言った

「えゝひどいですよ！！」

「ごめんごめん！」

「仕方ないなあ」

「名前は・・・」

「プレデター計画!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7269z/>

負の惨劇

2012年1月10日01時50分発行